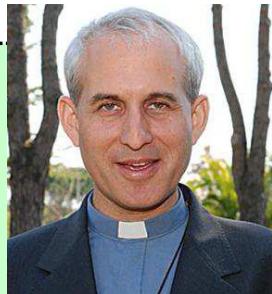


CAGLIERO'11

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.67 - 2014年7月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友

人の皆さん、

世界の多くのサレジオ会管区で、今月はすでに夏休みが始まっています。私たちの支部から、ボランティア活動や青年のグループにたずさわるたくさんの若者たちが、“現場に出かけて”います。私たちは彼らを目にし、奉仕と福音宣教にたずさわるこのリーダーたちに尊敬の念を覚えます。彼らは、若者への真の福音宣教者となる若者たちです。

3か月前、第27回総会は再び、次のように述べました。「ボランティア運動が、召命、宣教の次元を含め全人的に若者の成長を助けるということを、私たちはますます意識するようになっています(『福音の喜び』106参照)。」(GC27, 17)

ペルーの山村で活動しているスロバキア人のボランティア、スザン・チタルチコヴァは次のように話しています。「想像していのと違うこともあります、トウモロコシは黄色だけではなく、北に行くともっと暖かくなることもある、そして、神父であることが、必ずしも貧しいこととはかぎらないということです。」<http://www.infoans.org/-Volunteer Stories>

私の前任者、ヴァツラフ・クレメンテ神父様は、サレジオ会への一つの夢を残してくれました。あたかもクレメンテ神父様の“宣教の遺言”的です。その中で、神父様は次のように言っています。「いつの日か、すべての管区に宣教ボランティア活動のプログラムがあり、すべてのサレジオ会支部(特に養成共同体)に宣教促進グループがあるようになることを、私は夢見ています。」

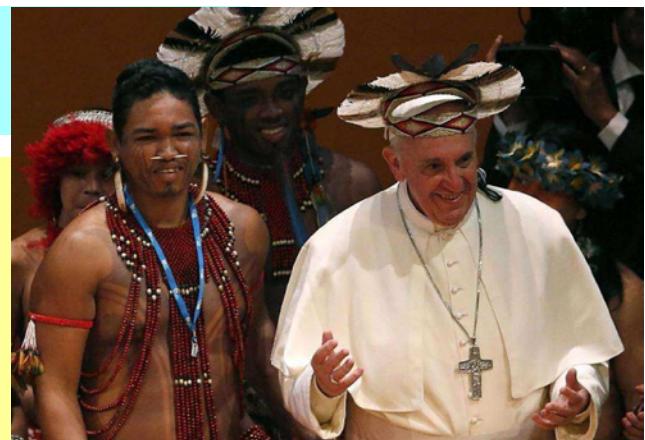
私たちは今、どこまで行っているでしょうか?

宣教顧問
ギジェルモ・バサニエス神父

出かけて行き、福音を告げよう

「わ

たしは、出て行ったことで事故に遭い、傷を負い、汚れた教会のほうが好きです。閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつく気楽さゆえに病んだ教会よりも好きです。中心であろうと心配ばかりしている教会、強迫観念や手順に縛られ、閉じたまま死んでしまう教会は望みません。私たちが憂慮し、良心のとがめを感じるべきは、多くの兄弟姉妹が、イエス・キリストとの友情がもたらす力、光、慰めを得られず、また自分を迎えてくれる信仰共同体もなく、人生の意味や目的を見いだせずに生きているという事実に対してです。過ちを恐れるのではなく、偽りの安心を与える構造、冷酷な裁判官であることを強いる規則、そして安心できる習慣に閉じこもったままでいること、それらを恐れ、その恐れに促されて行動したいと思います。外には大勢の餓えた人がいます。そして、イエスは倦むことなく、たえず教えておられるのです。『あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい』(マルコ6・37)。」



フランシスコ教皇

『福音の喜び』49

サレジオ会員の召命を生きるため 宣教師になった



自分のサレジオ会員としての召命がいつ生まれたのか、正確なところはわかりません。しかしそれが時と共にどのように成長したかは、よく覚えています。子どものときから、その後、サレジオ会の修練院で、私はいつも宣教師の話に感動していました。彼らは遠くの国々から来て、最も貧しい人々の中での生活について話してくれました。その年月を通して、貧しい人々への関心はいつも私の中にありました。しかしすると暖炉の火のように、たくさんの活動や勉強といふ燃えさしの下で隠れていたかもしれません。メッツァーノのサレジオ会支部にいたとき、姉妹提携や現地

の訪問を通して、ブラジルと出会う機会を与えられました。火が決定的に燃え立ったのはこのときでした。そのころ私は、イタリア・ベネツィア管区の宣教促進の担当になっていました。「グローバルな現実に目を開く学校」の若者たちと共に各地を訪れたことや、マダガスカルでの夏の体験は、最も貧しい人々の中で人生をささげたいという自分の望みを確認させてくれました。

「ここイタリアでもサレジオ会員が必要なのに、なぜ宣教地に行くの？」と聞く人もいます。海外派遣の宣教師として自分の国を後にするという選択が、物的、数的、統計的な観点からだけ眺められるなら、この異論は理にかなっているように聞こえるかもしれません。しかし、宣教地に向かう人は、何かから逃避するのではありません。自分の召命をいっぱいに生きるために出かけるのです。私の場合、それはサレジオ会員としての召命です。海外派遣の宣教師を志願する手紙を総長の手に直接置くことによって、自分の人生が自分のものではなく、神のものであること、その人生を最も貧しい人、最も遠くにいる人のために生きたいということを、私は示したかったのです。私が与えることのできるものは、それほど大したものではないかもしれません、しかし、貧しい人々のために働くときに感じる幸せが、最初に抱いていた多くの疑いへの最良の答えだと確信しています。

今、私は、ブラジル南部の港町、イタハイにいます。この町の大部分の人は良い暮らしをし、仕事をして生計を立てています。しかし、このような町でさえ、何百人の人々、子どもたちが、壊れかけた家で、暴力、疎外、麻薬のはびこる、見捨てられた状況で暮らしています。今、私は、特にこの人たちのためにここにいます。私が働いている社会事業、パルケ・ドン・ボスコの教育・司牧共同体と共に、教育と一人ひとりの成長、共に歩むこととあかと努力しています。もちろん、住民のほとんどが生活をしている町で、自分がここにいるのは正し今、私はここにいます、そして、現在いるところをさげるという、いつかかなうかもしれない夢です。しかし、自分のいるところ、派遣されるところ、サレジオ会宣教師の召命を生きるため、力いっぱい今まで、最も小さく、最も貧しい人々のためにさ



しを通して、希望と未来を人々にもたらすあまり問題もなく、ヨーロッパと変わらないいいのだろうかと思うこともあります。しかるよりも徹底して貧しい宣教地で人生をさ抱いています。それはずっと抱いてきた夢で、派遣を願うところ、どこにいても、サレジオに尽くしたいと思います。自分の最後の息をあげて！

イタリア出身、ブラジルの宣教師
ロベルト・カッペッレッティ神父



サレジオ会の宣教の意向

すべてのサレジオ会管区で宣教ボランティア運動が成長し、充実しますように

サレジオの環境にいる若者たちが、宣教グループあるいは宣教ボランティア活動の体験によって(国内あるいは海外で)、宣教活動の喜びを味わうことができますように。

リナルディ総長のころ(1920年)、世界各地のほとんどすべてのサレジオ会共同体に宣教促進グループがありました。1960年代(第二バチカン公会議後)に、宣教ボランティア運動が生まれましたが、それは今では世界中に広がっています。各管区で宣教の文化が成長するために、宣教促進グループは、若者とサレジオ会員自身を目覚めさせる手段になります。「次のことを認識しなければなりません。現在、……世の中の悪を前にして連帯し、種々の活動や奉仕に着手する、多くの若者がいるのです。ある青年は、所属する教区あるいは他の場所で、奉仕の団体に加わり、さまざまなかたちで宣教に取り組んでいます。若者が『街をめぐる伝道者』であること、喜びのうちにあらゆる街角、あらゆる広場、地上の隅々にイエスをもたらすことは、すばらしいことです」(『福音の喜び』106)!

